

## 臨地実習を経て変化した臨床検査技師像

◎西岡 優<sup>1)</sup>

九州医学技術専門学校 臨床検査科<sup>1)</sup>

私は幼い頃から命に直結する医療関係の仕事に対する憧れを抱いていた。職種を調べていく中で、臨床検査技師という仕事を知り興味を持った。「検査」とまとめられているが、多岐に渡る仕事内容であった。最初にイメージされるエコーなどの生理検査、細胞や組織を扱う病理検査、細菌の同定や薬剤感受性検査を行う微生物検査、適正な輸血を行う輸血検査、他にも血液検査、採血など患者様と関わる機会もあることを知った。これらは自分の強みである探求心を持つことで興味のある分野へ没頭し、資格取得までできるところにとても魅力を感じ、臨床検査科の道へ進むことを選んだ。

座学と実習を交え「なぜそうなるのか。」をグループで話し合う本校の特色は、根本から理解し知識として繋げたい私にとって、とても恵まれた環境であった。しかし臨床の現場では私たちが学内実習で学んだ手技の多くが機械化されていることを知り、臨床検査技師の存在意義に疑問を抱くようになったまま臨地実習が始まった。

臨地実習では検体検査で再検をする理由、そのまま臨床側へ返すものの見分け方に視点をおき、疾患や患者様の容態とつなげることをご指導いただいた。検査結果をただ返すだけでなく何か気になる点があれば追加オーダーを医師に促す場面や医師・薬剤師と治療の方針について話し合う姿を見た。病理診断室や手術室では、執刀医と臨床検査技師がコミュニケーションをとり、どの部分をみてほしいのか、病理医へ繋げることの大切さやNSTやASTなど検査室の外でも大事な役割を担っていることを知り、チーム医療の繋がりを強く感じた。

臨床検査技師は新たな業務として追加された内視鏡検査や、これから先もっと広がるであろう業務に対しても適応していかなければならない。そのためには、常に疑問を持ち根本から理解する探求心を持ち続ける必要がある。臨床検査技師として、やはり一番大切なことは「正確な検査結果」を出すことであり、疑問を抱く根拠を常に持つておくことは信頼性を築く上で大事になってくる。検査結果をそのまま提出するだけでは、臨床検査技師の意義は薄まる。チーム医療として様々な職業が関わっているからこそ相手の気持ちを読み取り、相手に合わせて伝える能力も兼ね揃え、考えることができる臨床検査技師だからこそその仕事をしていきたい。